

コミュニティ・パーソナリティの〈語り手意識〉

～半構造化インタビューから～

戸島 ※※
※※ TOJIMA

中京大学現代社会学部現代社会学科

学籍番号

1. はじめに

ラジオに欠かせない存在のパーソナリティ。彼ら彼女らは、一般人よりも“個性が強い特別な人間”なのだろうか。自分（調査者）と比べて“どんな人生の違い”があるのか。それを知ることは、ラジオに対するイメージが変わるのではないか。パーソナリティの魅力はどこからくるのか。パーソナリティの存在意味とは何か。パーソナリティたちは、どのように番組に関わってきているのか。番組内容ではなく、パーソナリティというラジオの語り手、いわば人間に視点を当てることで、ラジオに隠されているメッセージを読み解くことができるのではないか。それだけではなく魅力的なパーソナリティの生き方から、人として何か学べるのではないかと思ひ、今回のラジオ研究調査にあたって、私（調査者）はパーソナリティをテーマに選んだ。

今回は、コミュニティFMで長く仕事を続けている2名の女性パーソナリティへのインタビューをもとにした。共に北海道札幌市のFMえっぷルで番組をされているFさん（女性）、Mさん（女性）である。全国放送ではなくコミュニティFMの人気パーソナリティである。彼女たちは全国放送や圏域局のパーソナリティとどこが違うのだろうか。彼女らの語りのなかから、そうしたコミュニティFM独自のパーソナリティの意識を探ってみたい。

※教員補足

今回のインタビュー対象者は、大都市でありかつコミュニティFMが乱立しているともいえる札幌のコミュニティFM局「FMアップル」のなかで、看板パーソナリティとして活躍している2人である。FさんとMさんは、ボランティアではなく、有給のパーソナリティである。パーソナリティ・インタビュー項目は、ボランティアの場合と同じ項目で、インタビュアーである私が用意した質問項目に沿うかたちで半構造化インタビューを試みた。取材時間は、ほぼ2時間程度である。調査時期：2002年5月1日、2日

「パーソナリティ・インタビューの項目」

①. 今の仕事番組についての

- ・番組の構成とねらいは？
- ・自分の仕事？

②. これまでのキャリア

- ・これまでの人生のキャリアとそこでのラジオの関わりは？

③. 番組の語り（声を発信する）の中で考えていること

- ・ブースの中で考えていること
 - ・誰に向かって、どんな願いで語っているのか
- ④. メディアの中の自分は誰？
- ・自分のキャラクターイメージは？
 - ・メディアの中の自分と素の自分の違いはある

2. インタビュー項目①「担当の番組」と②「これまでのキャリア」に関するインタビュー：Fさんのケース

加：「今やっている、番組の中での仕事の話をお聞きしたいんですけど、午前中ですよ。」

F：「はい。9時から12時までの3時間。月金の帯です。」

加：「帯ですか。3時間ですね。そうすると勤務的には、多分1時間前ぐらいからこられる。だいたい8時ぐらいにこられる。おわりは。」

F：「終わって、後かたづけしてすぐ帰っちゃうことも多いです、あと私の番組に関しては1時間ごと色んな、札幌でお仕事を持っての方ですよ。色んなお仕事をしてる方が、こんな事を札幌でやってますっていうお話を紹介しがてらすね入れ替わり立ち替わり来るので。そういうのはまあ、私が見に行けるもの、取材出来るものがあればそれを見にいったり、あとは札幌市内の色んな所を見に行ったり、聞きにいったりっていう時間に午後は充てていますね。映画見たり、お芝居の番組もしていますので。」

加：「ある意味この仕事っていうのは境目がないところがありますよね。日常で暮らしていることが全て話題になったりとか、選曲も全部なさっているんですよ。」

F：「はい。なので、私はいまのアップルジャムになる前は、朝7時からの情報番組って言うのを3時間、3年やっているんですね。」

加：「1番通勤で聴いたりする時間」

F：「入ってくる情報を読んで曲かけるっていう、プラス9時代からはゲストをいれてっていうのを決めて、ゲストを入れたんですけど、その中でやっぱり、自分の好きな興味のある範囲のゲストが入れられたっていうところで、自分としてはこう、誰か人がねこの人がゲストで来るから、この人とやってって言われた訳ではないので、自分の興味の範囲で番組を作らせて頂いてる。私もアップルしかやってないんで分からないんですけど、いわゆる、企画、制作、出演みたいなどころがありますね。毎日毎日ゲストが変わりますのでね。例えば最初のトーク7分こういう内容、曲はさんで次のトーク7分でこういう内容とか、あんまり細かく決めないで、だいたいきょうはこんな事話そうかなあくらいの箇条書き2、3行ぐらいではあって、最初はこの1週間どうでしたみたいな話をして、曲をいれて、曲の間にさっきこんな話したから、次はこの話でいこうかっていう、曲までのトークの内容を曲までに打ち合わせして。ほとんど全部の番組そう言うスタイルでスタジオに入っちゃってるんですよ。」

加：「レギュラーとして頻繁にでてくださいる方もいる。」

F：「ほとんどレギュラーで毎週でもらっている方です。」

F：「みんなによく聞かれるんですけど、3時間やるってことに対して、内容はね、なにしろ好きにやるってことだから。」

加：「最初から帯で時間があつた？」

F：「最初は3時間朝番組だったんで、情報2時間は一人でやって最後の1時間だけゲストを入れたんですけど。2年前から番組が9時から12時の今の時間に決まって、そうなる9時から12時ってそんな天気とか道路情報やらないですよ。なので全部ゲストにしたんです。3時間全部ゲストにしたんですよ。そうじゃ3ないとすぐにネタがつきちゃうし、選曲も好きな方が、ほとんどラジオ好きで来てくれるので、番組の中身をね、今季節がこうで札幌でこういうことやってるからこういうことやろうよ、この内容喋るからこの曲かけようって言うてくださる方を、私はしゃべらないでほ

とんどゲストの方に盛り上げていただいている。」

加:「ゲストは毎週ですか。」

F:「毎週の方と、ほとんど毎週ですね。」

...

F:「私はスタジオにいて、とにかく来てくれた人たちにお話を聞いていく。」

加:「どうせ来る人たちも話すこと考えてくるもんね。それをひきだす。」

F:「そうですね。」

加:「その打ち合わせは直前なり、現場なり?」

F:「現場ですね。当初きちんと打ち合わせしなくちゃ相手に失礼だろうっていうのがあって、だんだん慣れてくると、このあいだの人が説明をしに来てくれてるんですよ。」

加:「皆さん素人ですよ。」

F:「そうですね。学生さんであっても1回でればそうですね。次回からはネタをもってきます。あとは友達でこういうのをやっている人がいるんですけど連れてきて良いですかとかね。周りに目を光らせるというか、そういう人がいないっていうのが分かっちゃうんですね。さしてこういう話をするので、1回経験すると、ゲスト側も制作サイドのような気持ちでくと思うんですよ。」

F:「私は午前中の放送だと、ドライバーもそうなんですけど、主婦層かなと思って。自分と同じ年代に近い主婦層のリスナーを意識してつくってるんですけど、実際学校に行かなくても色んな勉強、カラーの勉強ができるとか、スタイリストの人に、流行の歌手の話が聞けるとか。皆さんお忙しい方なのに個人的にも親しくしているせいか、3年目お付き合いいただいて。生放送なのでね、結構この時間にあわせて。」

加「ゲストの方も長いですね。」

F:「そうなんです。はい。で、こっちの繋がりが出来てきたりありますよね。なんか自分の仕事の時に、カラーコーディネーター、あ〇〇サン知ってるよとか、鳥の話になったら北海道の講演誰か知らない?って言ったら、じゃあ、野鳥の話の人良いんじゃない?とか。」

加:「F ネットワークですね。」

F:「私の興味のある人たちに、凄く幸せだなと思うのが、私がラブコールをした人ばかりに来てもらっているの、私はスタジオでわが家のように自分の家に友達が遊びに来るような感覚ですよ。なので凄くこう、人のおしゃべりを横で聞いているのって凄く興味がわくじゃないですか。」

加:「ええ。」

F:「女同士がわりとこう、主婦的な子育ての話をして、例えば苦労話をしてても、ファッションブルな話をしてても、男の人は意外と聞くチャンスがないかも知れないし。ああ、うちのかみさんもこんな事思ってるんだなあって思って聞いているかもしれないし。で、主婦向けに考えるって言ったからって、自分でね、子育てとか収納とかね、節約の事ばかり考えているわけじゃなくて、もっとどっちかっていうと、うーん、お芝居が今こういう役者さんが来てるとか、どこそこカルチャーセンターでこういうことやってとか、もうちょっと外へ外へ気持ちは広がっているのでも分私と同世代の主婦の人たちがね、そうなんじゃないかなっていうような感じで、自分で勝手に考えているんですけど。」

加:「それで、カラフルにバラエティーに富んでいるんですよ。」

F:「そうなんです。次から次へとバトンタッチで、全部私が聞き手で話してもらっているような感じなんです。」

...

F:「私一人で3時間やるのも大変なので、それだったらラジオなので番組に参加してみない?っていう言い方すると、みんなすごく喜んでくれるんですよ。そこはもう私も多少コミュニケーションが出来てて、でも私もこの番組を通して知り合った人とか、仕事もらったりとかそういうことも結構あったりしたんです。」

加:「これは番組始まってからお願いした感じですか？」

F:「私が札幌市内のフリーペーパーなりでみて、凄くこの人素敵だなんて思う人に電話をして出演交渉をして出て頂くようになった方ばかりで。」

加:「…その時に引き出す時ってというのはどうやってこう」

F:「やっぱり相手が喋りやすいようにってというのは、自分が前にでないで、まあ私の番組ではあるんですけど、相手が帰るときに楽しかったー！！また出してねってしてくれるように相手が気持ちよく喋れるようにってことだけを思いますね。」

…

F:「ご自分の専門の話以外の事って私聞かないので、何振っても答えてくれるって言う絶大な信頼はありますよね。安心感はあるので。」

加:「それぞれのジャンルに関して詳しくなりますね。」

F:「にわかにはなりませんね。多分リスナーの方でずっと聞いている方は、私程度にはにわかになっているとおもいますよ。お金払わずに。ラジオ聞くだけで。」

加:「講座みたいですね。」

F:「それはちょっと狙いですね。私が聞く程度のことは、しょっちゅう喋っていることばっかだと思えますよ」

加:「皆さんそれなりに喋る仕事してる方が多いですもんね。」

F:「ですね。ただ、この人にお芝居のことを喋ってっていつて時間をぼんって渡したら喋れないと思うんですよね。なので、その人がゲストに来てくれて、私がどうですか、こうですかっていうことによって話せる。でも中身は、自分が発信したいコンテンツっていうのはお持ちなので、それを私が振ってあげる。で私が時間を読んで、何となくまとめて時間になったら、じゃあ来て言っってあげるのが私の仕事なっていう所がある。」

加:「リスナーの代表みたいな感じですよ。」

F:「特にNPOの番組なんかは、私自身が聞けば聞くほど分かんないんですよ。そうすると、かなりとんちんかんな質問もでるんですけど、私の質問が、ゲストの方にも参考になるっていうし、私はつまらないこともきくかも知れないけど、こういうのが分からないひと、リスナーに10人に3人ぐらいはいると思って、どうか優しく教えて下さいって言うのでね。」

…

F:「私、あれなんです。子供が今中学3年生なんですけど、子供が幼稚園の時にPTAの会長にじゃんけんで負けてなった時にですね、市に援助をもらう時に大会をしなきゃいけないんですよ。その大会でたまたま2年連続うちの幼稚園がお番で司会をしたんですよ。そうしたら、他のお母さん方がね、いや～、Fさん司会上手～。司会者になったらいいのにって言われて。」

加:「10年ぐらい前の話ですよ。」

F:「ええ。司会したらいいのにって言われて。そうか私は司会者になろうと思って。子供が幼稚園の時に喋りの勉強に行ったんですよ。司会者養成の事務所じゃなくて、カルチャーセンターみたいなものです。知識がないのでね、レッスンして子供が学校にあがったら、結婚式の司会ができる様な人になろうと思って。」

加:「事務所とかに登録して？」

F:「登録して。子供が3年生の時は、1年で100本ぐらいはやったんですよ。」

加:「それは、上手だったからリクエストがくるんですか？」

F:「って言うよりミスがなかったんでしょうね。事務所がわかるんですけど。仕事が増えてきて、ラジオとかもやってみたいなって私が周りに言ったら、ここのオーディションがアルバイトニュースに出てるのを友達が見つけて、受けてみたらって言うんで、受けてみたんです。婚礼じゃない仕事も受けてみたいなって思って。」

オーディションの時に、開局の時にうち3人パーソナリティーをとりまして。〇〇さんなんかは、全部経験者をとったんですよ。うちの局は経験者を全部落としまして、全員未経験者。で、3人通ったなかでもう一人はテレビ局なんかでADをしていた人で、もう一人がスチュワーデスだった人で、まあ喋りは初めてですよ。でもそれぞれの人生経験をいかして。」

加:「それぞれカラーがありながら。」

F:「そうですね。で、開局の時に今までの人生経験をいかして、そのフィルタを通してお話して下さいって言う。」

加:「局長がいうんですよ。」

F:「そうです。中山が。」

加:「逆にそういう人をとったのかもしれないですね。」

F:「そうですね。逆にコミュニティだからっていうそういう狙いがあったのかもしれませんが。なので、ラジオは全くここで初めてで。」

加:「幼稚園の司会をやる前は放送部だったとか、なんかないんですか？」

F:「全然ないですよ。」

加:「色々聞いてると、本当に全く接点がない人がおおいんですよ。」

F:「今思えば、学生時代とか喋ることは嫌いじゃなかったですよ。弁論大会とか出ちゃうようなタイプではありましたね。人前で喋ったり嫌いじゃないですね。ただ、ずっと主婦でいるつもりでしたので。」

...

F:「あと、人前で話すっていうことに対して欲が出てきたのかもしれないですね。ラジオやってる業界の友達も増えてきますと、だんだん憧れもでてきますしね。」

加:「はずかしがりやとかそういう事はなかったんですね。カラオケなんかで歌っちゃう」

F:「そうですね。」

加:「止めようとおもったとかは？」

F:「いやー、私、でもこんなに続くとは思わなかったんです。こないだ開局記念の時にね開局当時の事を知ってる人って、開局メンバーは少ないので聞かれるんですよ。私こんなに長く続くとは思わなかったって言って笑われるんですよ。」

...

3. インタビュー項目①「担当の番組」と②「これまでのキャリア」に関するインタビュー：Mさんのケース

加:「では、ざっくばらんでけっこうなんですが、そのMさんの、その今までのキャリアっていうんですか、ここに来る、至る、あ、今の仕事から聞いた方がいいですね。ここではどんなお仕事を。」

M:「ここでは、FMアップル、アップル情報探偵団という番組を月曜日から金曜日までのウィークデー、午後2時から5時まで生放送で。」

加「毎日ですよ。」

M:「毎日です。」

加:「うーん。」

M:「まあ、毎日だからある程度のネタは常に季節のものとか、うんと、通年使える物とか今流行の話題とかいうのを持っ

てはいるんですけど、結局は時間の都合とかで使えないでそのままお蔵入りになるものとかたくさんあるので。」

加:「それはあの、かなり準備しなきゃいけないってことですか。」

M:「そうですね、やっぱり日常的にたとえば、自分が見に行った物とか、場所とかの資料っていうのは必ず持って来ますし、そうすると、行ってきたよこんな所だったよ、楽しかったよっていう話題と共に、たとえば入館料がいくらでとか、営業時間が何時から何時まででっていうのを正確にお知らせすることができて、それを合わせて初めて情報だと思ってい

るので。」

加:「そうですね。それを週五日ここにいと週末ですよ。」

M:「まあ週末、もしくはテレビとか新聞とか雑誌とかで見聞きしたこととか、全部ネタになるので。結局3時間、毎日3時間しか働いてないですよ。いわば。普通の人とは9時から5時まで仕事をしていますよね。でも私は毎日3時間しか働いてない。でもこの3時間をつくるために、その他の時間が全部必要になってくるっていう毎日をもうここ7年くらい。」

加:「7年っ!!。」

M:「ええ。過ごしてますね。」

加:「てことは、ここが出来たときくらいからですか。」

M:「ここが出来る前から。あの一、この仕事を始めたきっかっけっていうのは、もともとこの業界にいたしゃべり手の人に向いてるからやれと言われてたんですよ。私の中ではこの仕事は、仕事っていう枠の中に入っていないくて、最初意外だったんですけど、向いてるって言われて、じゃあやってみようかと。」

加:「その前までは全然こういう仕事っていうのは」

M:「は、してないですね。」

加:「専門学校に行ってたっていうわけでもないし。」

M:「ええ、専門学校はインテリアデザインの図面を書くほうに行っていたので。」

加:「放送部とかそういうのはやっていた。」

M:「は、全然やってないですね。」

加:「演劇もない。」

M:「ええ。」

加:「てことは接点がないですね。」

M:「ないですね。ただあの言葉っていうものには昔から興味があって、詩をかいたりとか、歌とかも歌ったりとかしてて。いてって言うても。」

加:「ここに来る時間は。」

M:「1時間前ですね。」

加:「みなさんそんなもんなんですか。」

M:「番組的に、仕込みがものすごく必要だったりということであれば、だいたい1時間から1時間半ぐらいあれば。」

加:「終わってからは。」

M:「終わってからは次の日の用意をするってことで約30分から1時間くらいいたりしますので、2時から5時までの番組だと、午後から6時までかかるっていう」

M:「よく言われるのが、話すこと決まっていなくて。」

加:「そうですね。ラジオって特にアバウトだからその間自分で考えながら喋るって言う。あんまり考えないか。」

M:「そうですね。まあアバウトっていうのはどうかと思いますけど。きちっと時間帯もなってますんで。この番組に関しては、その時々ネタを出していくっていうことは、ある意味本当の意味でのライブっていう。」

加:「今日はだいたいこんなことを喋ろうっていうのは。」

M:「そうですね。頭の中には。」

加:「あんまりきっちりメモとかはしない。」

M:「しなくていいです。私はですけどね、している人もたくさんいらっしゃると思いますけど。」

加:「ああ。ちょっと話飛ぶんですけど、私こういうインタビューしたときに必ず聞くのが、色んなところで聞くと、続かない人とかかなり続く人と分かれるみたいなんですよ。その境界線ってなんなのかなっていう。」

M:「コミュニティにおいてですよ。」

加:「そうですね。1ヶ月で辞めちゃう人は辞めちゃうっていうんですよね。それをなぜ7年間も。3時間しか働いてないっていうけど、端から見たら3時間を帯でもつっていうのは大変なことだし。」

M:「辞めてしまうっていうことには色々な事情があると思うんですよね。例えば雇われている側と雇っている側で契約って言う問題がありますよね。ボランティアなのかギャラがあるのか」

加:「これは番組契約ですよ。」

M:「ええ、月っていうかたちになってますけど。」

加:「あんまり疲れたっていう感じは今まででこう、喋り疲れたっていうことはないんですか。」

M:「喋り疲れたっていうよりは、この仕事はどこまでやったら終わりがあっていう仕事じゃないですよ。常に時代は変わってますし、常に話題も動いてるし、常に自分も動いてなくちゃいけない。」

加:「7年ってある意味自分の人生の成長と共にいく、聞いている方も一緒にこう。」

M:「その辺の兼ね合いはどうしようかっていう事は常に考えていますね。」

加:「高校生で聞いている方も今はずいぶんこういくわけですよ。」

M:「で、あまりにも声の調子とか話す内容とかっていうのが自分の成長と共にどんどん変わってしまうと、今度は聴いている人が違和感を覚える。スタートしたころのスタンスを保ちつつ、でもその中でも自分の成長している部分とか、こういう風に思ったっていうのを伝えていくっていう部分ではその辺の兼ね合い、頃合いっていうものが凄く難しいなあって。やっぱり声も年によってどんどん下がっていきますし、若い時みたいなテンションでいくのも辛くなってはきます。もちろん。」

加:「7年ぐらい幅があると。」

M:「ええ。でもその辺を違和感なく少しずつ移行していくっていうことは、やっぱり年と共に意識していかなくちゃいけないことだろうとは思いますが。」

加:「やっぱりリスナーも変わって来るものですか。」

M:「そうですね。ずっと聴き続けるって人もいれば、たまに合わせて聴いているって人もいれば、札幌に初めてきて新しく聴くっていう人もいますね。まあ一般的に。う〜ん。」

加:「向いてるからやれと言われて、これを受けに来たんですか。募集とか。」

M:「その時はたまたま事務所に所属していたので、その事務所の人たちとこの繋がり。でも今はフリーなので。」

加:「仕事としてはここが初めて、前はどこで。」

M:「前はコミュニティーFMでのスタートだったんですけど。」

加:「ああ市内の。」

M:「ええ。でも基本的にフリーなので他局からの。」

加:「ああそうですか。」

M:「仕事、依頼があったりとか、CMのナレーションがあったりとか、イベントの司会があったり。それは今抱えている仕事に支障がでない程度に、例えばウィークデーは番組があるので土日とか、仕事が終わったあと深夜とかいう風にしています。」

加:「その最初の頃の事を思い起こして欲しいのですが。向いてるからという形ではじめてみて、向いてるからっていうことで登録したんですか事務所に。」

M:「その頃は事務所に入っていなかったんです。たまたま知り合いがやれということで、そうかぐらいのノリだったんですよ。で、はじめているうちに自分がちっちゃい頃から言葉っていうものを使ってきたにも関わらず、ラジオっていう仕事ができない。」

加:「出来ない？」

M:「出来ない。ちゃんと出来ない。でも皆さん喋ってますよね。お話ししてるでしょ。だから極端のことを言ってしまう

えば誰でもでれるんですよ。ラジオには。ただそれが、仕事として成立するかしないかっていうところは、やっぱりある程度やると、興味本位で始めてみても、結局一番最初にぶち当たる事だと思っうんですよ。壁として。そこから辛い部分もあり、面白みもあるってことで、私の場合は面白みが勝ったんですねきっと。で、なかなか底が知れない仕事だと、これはちょっとやってみようかと。」

加:「逆にかき立てられたという。」

M:「ええ。で自分なりに見たり聞いたりしながら、ここはこういう風に言うのかとか、こういう風に伝えるのかというのを色々勉強して…」

加:「それは他のパーソナリティの人たちのを聴いたりとか、そう言うことでもなく。？」

M:「あまり北海道というのは意識してないですね。自分の好きなタレントさんとか、アナウンサーさんとか。」

加:「それはラジオとはかんけいなく。」

M:「には限らないですね。」

加:「当然話し方に興味をもつきますよね。」

M:「アナウンサーとパーソナリティという仕事は違うので。」

加:「違いますよね。」

M:「だから、きれいに話すってことはもちろん大前提かもしれないですけど、仮に滑舌が悪くてもそれをキャラクターにしまったりとか、嫌な感じを与えない程度の味にしていったりとかいうことで、自分の不得手な部分を補っていきけるという風に思っやっっているんですけど。ただやっぱりそうはいっても、ここまでは出来ていなくてはいけないという基礎の部分もかなりあるのでそのあたりは自分で意識して直していくしかないですね。習ってもしょうがないことで。習ってしまうと、その学校の独自のカラーがついてしまったり。」

4. インタビュー項目③「語り」に対するインタビュー : Fさんのケース

加:「ちょっと3番目なんですが、ブースの中で誰に向かって語りかけるのかなって。」

F:「目の前に人がいるつもりで話してますね。実際、私いるんですよ。だけど、ゲストの方と盛り上がると、リスナーの方が疎外感を受けると聞いたことがあるので、やっぱり、盛り上がったら、ひとくぎりの間にリスナーの人にどうですかって語りかけたりとか、必ずリスナーがいるって意識はしながら。ただ1人語りをするって言う時間は今のアップルジャムになってからはほとんどないので、朝番組の時は最初の2時間毎日1人でしたけど、今はほとんど無いですね。」

加:「やりやすいですか？そういう意味では。」

F:「そうですね。ただマイクのここで言葉が落ちないように、向こうの人に届くようにっていう気持ちはいつもありますよね。」

加:「そう言うときにたとえば、具体的な人の顔が浮かんだりするんですか？」

F:「あー、やっぱり子育ての話をするれば、自分の子供が小さいときのことを思い出しますしね。」

加:「リスナーの顔みたいなものってのはどうですか？知っている人の顔とか。」

F:「あー、やっぱり同世代の女の人を意識してるかもしれないですけどね。やっぱり、番組作りのときのリスナー層って考えてますよね。そういうぐらいの感じですよ。」

加:「やっぱりそれが、イメージできるって感じですよ。」

F:「そうですね。」

加:「ゲストの方が疎外感を受けないようにっていう、それも1つの気遣いですよ。あちはなんか気を遣うことってありますか？例えば電話で相手を説得するようにしゃべるとか。」

F:「そういうのはないですけど。なんだっていわれると、何だって感じですけどね。」

加:「番組自体はFんの番組ってリスナーの方は理解しているわけですよね？」

F:「ええ。そうだと思います。」

加:「それで、Fさんのファンなりがいるわけですよね。」

F:「ええ。なんか私のお部屋で、みんなとお話して、帰って行くのを、リスナーの人が盗み聞きしているっていう、そういう感覚は。」

加:「そうですね。そういう感じなんですね！！」

F:「多少、かなり素の感じで話してますよね。アナウンサーさんみたいじゃないと思う。きっと。」

加:「やっぱり感覚的には素で？」

F:「そうですね。北海道弁もできますしね。私北海道を出たことないんですよ。」

加:「昨日〇〇さんとしゃべって僕の知っている北海道弁が全然通じなかったんですよ。」

F:「え、なんですか？」

加:「なまらとか。使わないって言ってました。」

F:「私の親世代までじゃないですかね。そういうわかりやすいのよりも、北海道はイントネーションですよね。それは、インターネット放送が始まった時にね、東京とか横浜とかが、アクセス成功しました、おめでとうございませつかメールがきて、Fさんの北海道なまりが可愛らしいとかね。良い意味で言って下さってると思うんですよ、懐かしがって。すごい恥ずかしかったですよ。なまってるんだなって。」

5. インタビュー項目③「語り」に関するインタビュー：Mさんのケース

加:「あの一凛く抽象的で答えにくい質問かと思いますが、ブースの中で考えたり心がけたりしていることっていうのは何ですか？ガラスの中で、誰に向けて語っているのかな、どういうところを思い浮かべるのかなっていうことなんですけど。僕らみたいな知らないにげんからしたら不思議ですよね。観客いないわけですから。」

M:「そうですね。1人で話してるんですもんね。ただ、現実問題1人で話してますよね、ブースの中で。でも、聴いてくれている人がいるっていうのが大前提です。」

加:「それは顔が浮かぶんですか。」

M:「聴いてくれている人がいるんだっていう気持ちの方が大きいんですよね。」

加:「確信ですよね。こうやってかたっているのを誰かが聴いてるんだって言う

M:「それに対して凛く思うのが、ラジオって公共のものじゃないですか。ただ公共のものでありつつ、例えばテレビもそうなんですけどひとつのところに50人も集まって見ているわけではないですよね。凛くパーソナルな部分もあるんですよ。そのへんの兼ね合いっていうのは常に考えます。」

加:「僕ら電話も研究してるんですけど、電話の研究をしてからラジオを考え直すとやっぱり凛く面白いなって。車の中とかあたかもこう、自分が1対1で話されているかのようなそんな感じでできているんですよね。」

M:「そうですね。でもたくさんの方がきいているっていうことはとにかく大前提。だけれども、聴いている個人はみんなパーソナルな空間で聴いているっていうことを、やっぱり常に意識してますよね。」

加:「それは森本さん自身が1人1人が個室で聴いているっていうそういう人たちに語りかけるっていう。」

M:「そういう人たちがいっぱいいるんだっていう風に考えています。」

加:「グループでいるわけじゃないんですよね。」

M:「だからみなさんっていつてしまうこともありますけど、その皆さんは1人一人なんですよね。それを常には意識しています。」

加:「ああ、ここまではっきり言った人はじめてです。うーん、本当1人1人は別々に聴いているんですよね。」

6. インタビュー項目④「メディアの中の自分」に関するインタビュー：Fさんのケース

加：「先ほど素で語ってるって言ってましたけど、キャラクターイメージって、それぞれ自分のカラーっていうのはちがうんですか。」

F：「区の情報なりね、そういう話をする時には一主婦として話をしてるかもしれないし、内容に合わせて、自然と変わっているかもしれない。」

加：「Fというキャラクターはどうか？本名ですよ。」

F：「ええ。」

加：「あんまり別の名前とか考えようと思わなかったんですか？」

F：「私、素人だしてというのがあってスタートしてますからね。開局のころなんかはね、私素人でなんにも分からないからってという台詞を外の人に良く言ってたらしいんですよ。そうしたら、●●の編集長の人が出てきて、私も●●立ち上げたときには主婦ばかりで素人編集者ばかりですみませんって言ってたけれども、Fさんも半年たったでしょって、1年たったら素人では通用しないって。あと半年たったら、Fさんが1年前まで主婦でお母さんだったとしても、もうラジオの業界1年した人っていうつもりで、みんなは見るし、そう言うことを当然答えられなくちゃ嘘だって、だから素人だからってという感覚も口にだすとそうやって思っちゃうからって。」

加：「やっぱりプロ意識っていうのは当然？」

F：「そうですね。そういう感覚でやらなくちゃいけないっていうのを。」

加：「キャラクターっていうより、仕事モードですよ。体調の良い日悪い日っていうのは出るものですか」

F：「あのね、私は毎日放送なので言われたことがあります。リスナーの人に。ファックス来たことがあります。ちょっとおばあちゃんが死にそうで心配だった事があるんですよ。そうしたら、今日のFさんは元気がないって。なんかあったんですかってファックスがきて、思わず本番中にぼろっと、実は今おばあちゃんが危なくてねって言ったことがあります。本当は声に出ちゃいけないのに本当にごめんなさーいって。じゃあテンションあげてくぞー。じゃあ曲。とか言ってありますね。分かるみたいですね。毎日聞いてらっしゃる方は。まあ、そのまま。のんびりした方なんですよ。私自身が。なので、少しのんびりムードになってくれればいいなあって思います。」

7. インタビュー項目④「メディアの中の自分」に関するインタビュー：Mさんのケース

加：「ブースのなかで語っている自分と普段の自分っていうのはある意味凄く連続している、素は出しているんですか。それとも、パーソナリティーとして固めているものなんですか。」

M：「私はばら売ります。人はいろんなパーソナリティーをもっていますよね。一人に。そのある部分を仕事で使っているということです。偽っている訳でもなく、作っているわけでもなく、色んな人格を持っている自分の一部を使っている。だから、プライベートの時もこうやってお話ししているときも、常に一部一部が出ている。」

加：「それは同じではないわけですね。多面的なアイデンティティーがあるんだっていう。」

M：「多面性のどの部分を軸にしていくかっていう事だと思うんですよ。例えば、プライベートだとちょっとリラックスしている自分っていうのはありますよね、その多角形の自分のある一部っていうのを軸にして仕事をしてはいるんですけど、でも多重人格でも何でもないので、その人格だけに固執するってことではないですよ。で、どこをベースにするか、で、でもたまに違う自分が出てきて、おちゃらけてみたり、シビアなことをいってみたりとか」

加：「多角形の自分使わせて頂きます。良い言葉ですね。普段その事を理論的に考えてる訳ではないんですか、それともかなり意識なさってるんですか。ここは分けなきゃねとか」

M：「それは居心地がいいかどうか。っていうことがポイントになります。例えばプライベートでいるときに、どの自分が一番居心地がいいかどうか。それは考えることではなくて、自然にそうなっていくものだと思うんですよ。言葉で説明するといかにも考えてやっているように聞こえるかも知れないけれど、その場面場面に1番居心地の良い自分が出てきて

いるのが素だと思うので、どれも自分。だけれども、会う場所、一緒にいる人、している仕事によって全然違う私に見えるかもしれない。」

8. コーディング・カテゴリー分類・まとめ

●〈①「担当の番組」と②「これまでのキャリア」：Fさん〉

自分の好きな興味のある範囲のゲスト

企画・制作・出演みたいところ

なにしろ好きにやってること

ゲストの方に盛り上げていただいている

お話を聞いていく

ゲスト側も制作サイドのような気持ち

繋がりが出来てきたり

自分の家に友達が遊びに来るような感覚

同世代の主婦の人たち

私が聞き手

番組に参加

すごくこの人素敵

自分が前に出ない

また出してね

“にわか”にはなりますね。

自分が発信したいコンテンツというのはお持ち

司会者になったらいいのに

司会者になろう

カルチャーセンターみたいなものです

結婚式の司会

1年で100本ぐらいはやった

全員未経験

喋りは初めて

人生経験を生かして

今までの人生経験

ラジオは全てここで初めて

喋ることは嫌いじゃなかった

人前で話す

こんなに長く続くとは思わなかった

●〈①「担当の番組」と②「これまでのキャリア」：Mさん〉

3時間をつくめのために、その他の時間が全部必要になってくる

向いているからやれ

仕事という枠の中に入っていなくて最初意外だった

向いている

言葉っていうものには昔から興味があって

常に自分も動いてなくちゃいけない

スタートしたところスタンスを保ちつつ

たまたま事務所

事務所の人たちとここの繋がり

今はフリー

たまたま知り合いがやれ

だから極端なことを言ってしまうと誰でもやれるんですよ。ラジオには。

一番最初にぶち当たる事

面白みもある

面白みが勝った

アナウンサーとパーソナリティは違うので

基礎の部分もかなりある

自分で意識して直していく

● 〈③「語り」 : F さん〉

目の前の人がいるつもり

ゲストの方と盛り上がると、リスナーの方が疎外感を受ける

リスナーの人にどうですかって語りかけたり

同世代の女の人を意識

私のお部屋で、みんなとお話して

リスナーの人が盗み聞き

● 〈③「語り」 M さん〉

1人で話してるんですもん

聴いてくれる人がいる

パーソナルな部分

そのへんの兼ね合い

パーソナルな空間で聴いている

皆さんは1人一人

● 〈④「メディアの中の自分」 : F さん〉

素人

ラジオの業界

そういう意識

本当は声にでちゃいけない

● 〈④「メディアの中の自分」 : M さん〉

私はばら売りです

いろんな人格

自分の一部

一部一部が出て行く

多面性

多角形の自分

違う自分が出てきて

居心地

一番居心地の良い自分

全然違う私

●2次コーディングとカテゴリ抽出

「転機」について

- ・(たまたま) 司会者が向いていると(言われて) →「司会者になろう」
- ・たまたま
- ・喋ることは嫌いではない
- ・喋りは初めて
- ・未経験

「番組について」

企画・制作・出演

ゲスト側も制作サイド

「リスナー」

語りかける

聴いてくれる人

パーソナルな空間

皆さんは1人一人

リスナーの人が盗み聞き

「メディアの中の自分」

ラジオの業界

多面性

多角形の自分

●コーディングとカテゴリ化のまとめ

Fさん、Mさんは、それぞれタイプや考え方も少し異なる。しかし、共通なのは、「偶然」「たまたま」パーソナリティになったということである。と同時に、二人には、「向いている」と周りが勧めるほどにしゃべり上手であり、「向き」である。「喋るのが嫌いでない」面である。人生のプログラムにはなかったが、学校を出て、社会人として生きてきて、その途中で、初心者、未経験者からパーソナリティを始めている。

ただ、長いキャリアを経てきて、二人とも、「素人」のままではなく、研鑽を積んでいる。社会的なネットワークのひろがり、番組へのプロとしての準備などにも抜かりがない。「研鑽と準備」が、人気パーソナリティとして継続している理由でもある。

私人、個人ではなく、自分を多面的に捉え、ラジオの語りの自分を意識し、ゲスト・リスナーと自分の関係、私的な自分とパブリックな空間との「兼ね合い」などに配慮できている。「兼ね合いへの配慮」このあたりもキーワードとなりそうである。

「たまたま」「偶発」

「潜在的な向き」

「研鑽と準備」

「語り手への自覚」

「兼ね合いへの気配り」

こうした要素は、コミュニティパーソナリティにおいても、コミュニティ FM のプロとしての要件となっているように思われる。

9. まとめ

同じコミュニティのパーソナリティーでもそれぞれの意識や経歴は全く違う。コミュニティならではの人との繋がり方がある。コミュニティを支えているからこそ、広がっていく世界があり、そして新たなメディア（例えばラジオ講座など）が生まれようとしている。人とメディアとが密接な関係だからこそ新たに進化していくものがある。メディアが生むメディアがあるのだと発見した。非日常的な生活をしているように思えるパーソナリティーだが、一言一言が社会の一員としてリスナーに伝えるメッセージ性は大きい。擬似イベントばかりのテレビとは違い、生の声でリアルタイムに発信しているラジオだからこそ、パーソナリティーのその時の気分がリスナーに分かってしまうなどの「身近さ」を感じる。人間同士のネットワークがあってこそ、メディアとしてのネットワークが成立するのだ。私たち一般の人とある意味最も身近で、密接なメディアの担い手であると感じる。そして様々な文化を広める手助けもしているのだ。発信源でもあり、リスナー代表でもあるのだ。